

Title	ある抑鬱症患者のロールシャッハテスト解釈
Author(s)	氏原, 寛
Citation	大阪外国語大学学報. 34 p.1-p.15
Issue Date	1975-02-28
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80554
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

ある抑鬱症患者のロールシャッハテスト解釈

氏 原 寛

A Rorschach protocol interpretation of a depressive patient

Hiroshi UJIHARA

While a good deal has been said about the clinical usefulness of the Rorschach test, the objective validity of the test still remains uncertain, opinions ranging from an extreme praise to an extreme scepticism.

This lack of really convincing arguments on the part of the practitioners as to the use and the limitation of the test is doubtless responsible for the general negative attitude toward the psychological testings currently prevalent in Japan, as well as the failure of the attempt to integrate diagnostic and therapeutic understandings which sometime ago attracted attention of many clinical practitioners.

The aim of this paper is to present a concrete example of the entire process of a Rorschach test interpretation, thereby discussing how the test can actually be helpful for a patient. Underlying this discussion is the author's belief that the validity of this test should be discussed in the context of individual cases, and not in abstract. The author also wants to emphasize that we should always clearly state (1) what we want to know about the patient, (2) purpose and (3) the process of reasoning. In other words, the test should be conducted in such a way that the tester can grasp and describe vividly what kind of a man the patient is. Prerequisite to this, naturally, is the interpreter's total empathy, and his capability to put himself in the patient's position.

Since all this is done through the personal experience of individual interpreter, it is extremely difficult to describe this vivid image in general terms. It is quite understandable that the clinical validity of the test has been claimed by a number of practitioners despite difficulty of verifying its objective validity.

We should keep in mind that the interpretation is always subject to arbitrary distortion. Thus the only way to minimize the arbitrariness is to have the result of each interpretation exposed to the criticism of the general public. It is true that particularity could lead to universality, but it is also true that the tester cannot claim the universality of his interpreta-

tion without showing concrete evidence to support his interpretation. It is only by enriching ourselves with individual cases of interpretation that this technique can get to be scientific.

With the above in mind, I will proceed to report the whole process of an interpretation of a Rorschach protocol of a particular depressive patient through which to show what we can expect of the test.

はじめに

ロールシャッハテストの解釈には、かなり思弁的な色彩が濃い。思弁的とは個性的ということでもありうるが、個性的であることが必ずしも客観的であるということとはできない。個々の解釈例がどの程度の客観性をもっているか、また、もちうるすればどういふ場合かは、実際例に基づかぬ限り空論に終る恐れがある。ここにロールシャッハテストの一解釈例を報告するのは、臨床家がこのテストを通して、何をどのように理解するのかを示すためである。ロールシャッハテストの「臨床的、有効性については、多くのことが言われているけれども、その「客観的、妥当性については、少なからぬ疑問がある (Ainsworth, 1954; 小保内, 1958; Harris Jr., 1965; Holzberg, 1965;)。そのために、このテストに過大な期待を寄せたり、逆に、ほとんど認めようとしない態度が生じやすかった (ヘルツ, 1971; Klopfer, 1968; Schafer, 1970)。最近アメリカやわが国に高まりつつある心理テストに対する批判的な見解 (鈴木, 1972; 村瀬, 1973; Holt, 1972) も、病院臨床の厳しさはともかく、実践家の側からする、このテストの効用と限界についての吟味が不足していたことと無関係ではない。それは、わが国でこのテストの解釈の公表されたものの意外に少ない事実にも現れている。

その中で、たとえば片口 (1971) のものは、症例は豊富であるが原資料と結論とのつながりがはっきりせぬうらみがある。村瀬 (1970) の報告は興味深いけれども、テスターによる解釈というよりもテストに語らせているところに、解釈技法としての面白味に欠けている。児玉 (1960) の場合は、わが国のロールシャッハ研究の啓蒙期の仕事という印象を免れ難いし、河合 (1969) のものは、とくに解釈例の報告に重点の置かれていないのが残念である。アメリカについてみても、まず Schafer (1970) のあげている例は、ある種の防衛機制の説明には便利であるが、全体としてのパースナリティ像を描く点では不十分であるし、Phillips & Smith (1967) の場合、示唆的には違いないが、単に解釈の手順を示したに止まっている。各プロトコルの中のきわだった特長から出発し、盲分析を主張する Piotrowski (1957) の報告は見事であるが、仮設の設定に恣意的な感じが残る。Ainsworth (1954) の解釈は詳細であるが、症例が一つにとどまっているのが物足りない。Klopfer (1962) のいくつかの報告は簡明にすぎるところがある。結局、Beck (1967, 1969) の報告が、質量共にもっとも充実しているようである。

いずれにせよ、具体的な資料に基づいて論議せぬ限り、ロールシャッハテストの臨床的有效性も客観的妥当性も、確かめるすべがない。そうした論議に必要な素材を提供することが、このレ

ポートの狙いである。

症例

33才の男子会社員に筆者がテストを施行した。症例は、職場で希望退職者の募集のあった際、それが自分をさしているのではないかと気になりはじめ、以来仕事に自信を失って物忘れがひどくなり、電話のとりつきもできなくなった。人が笑ったり話したりしているのを見ると、自分のことを言っているように思え、死んだとか殺されたという字をみるだけで憂鬱になり、会社へも行けなくなっている。妻によれば、出勤するといって家を出て、一日中バスに乗っていることがあったという。両親、兄との四人暮らしであったが、兄の独立と父の死後、母と二人で10年近く暮していた。3年前の結婚直後、妻と母の間がうまくゆかず、はじめて今のような症状が出て通院したが、母と別居することでその時はおさまった。そこで再び母をひきとったが、その後も2、3度似たような症状があった。そのつど通院し投薬をうけて治っている。今回は、家の都合で母が兄の所に移ってから発症した。現在投薬中。医師は「ただの抑鬱症、」といっている。

プロトコル*

- I 15" なんかハナのように、ハナビラのように見えますけどね。(もう他には?) ま、チョウチョですか。チョウチョのなんか頭ないような——。他にあんまり。V/ΛV/30"

(inq.) 僕は花やってる関係で、変った全体の感じが、これ (D₂) がハナビラのようにちょうど開いている。正面からみて左右対称に開いているから。これ (D₂) がハネで、昆虫採集か何かのちょうど飾ってある。ハネの形が違うんだが、それを思い出して。(頭がないとは?) チョウチョだったらこういうような (触覚の手つきを示す)。最近あまりチョウチョ見ないけど。

1. W	F	Pl		0.5
2. W	F	A	P	1.0

- II 15" 人間と人間が向いあって、なんか手合わしている感じがですね。手と足をこう向いあっている感じ。まあそう思いますけど。——そんな感じです。ま、こんな顔なんかの表情なんかはトリみたいですけど。そんな感じです。部分部分についていうのですか、全体の。(好きな通りに)。——ま、人間が向いあっている感じがですね。あとはあまり。20"

(inq.) ヒザ (D₁) を合わして、手 (d₁) を合わしている感じ。顔 (D₂)。胴体 (D₃)。顔がクチバシなんかあって人間を茶化したような感じにみえますけど。トリみたい。クチバシがあったりして。なんかニワトリみたいな感じもしますけど。顔がニワトリ的にしてあるけど、人間が手を合わしている。

* スコアリングはすべて Klopfer (1954) によっている。また、——は1分経過——は2分経過を示す。

3. W M H 3.0

III 13'' これもやっぱり人間が向いあって、まん中にある釜みたいなものをお互にもち上げて
いるという感じです。なんか赤いのもちょっと気になるけれども、なんかどこか作業場という感
じ。火が燃えてるという感じで——、ま、そんなところです。20''

(inq.) 火 (D₂)。これ (D₁) も釜のところで火が燃えてる。釜 (D₃)。作業場の感じ。工場み
たいに火が燃えてる。鉄工所いうたら何ですけど。そういうところで働いているという感じ。

(男? 女?) 仕事の性質からみて男の感じだが、胸なんかつき出してるから女にもみえますけ
ど。こんなことするんだったら男だと思う。

4. W M, CF H, Fire P 3.0

IV 10'' ここなんか、こんなケモノあるかどうか知らんが、ケモノが、よう空飛ぶ動物みたい
な感じ。ハネ広げてバァと飛ぶ。ケモノが手足広げて、なんかそれにハネがあるような感じで
すけど。それから——、なんかあのケモノの顔のような感じもしますね。これが目あってそう
いうふうなガイコツ的な感じもする。ちょっとあの、動物の正面からみた顔のガイコツ的な感
じしますね、今のですけど。これ (d₁) がツノあってこれ (D₁) が正面が鼻で——。二通りこ
うみえますけど。それだけです。25''

(inq.) 頭 (d₂)。両方 (d₁D₃) とも足。なんか向うの、アフリカの映画で、木から木へ飛ん
でゆく動物見たような気がしますねん。(ケモノには?) 全体の感じが毛皮のような感じしま
したね。暗いところにいますね。夜飛ぶ。(コーモリ?) コーモリじゃない。コーモリに似たハ
ネ広げて空を滑走してゆく。くぼんでいるようなとこ (D₂ の根元の d₁ 部分) 目があって。こ
れ (d₁) がツノあって、これ (D₂ の根元から D₁ 上部の S 部分にかけて) が頬のアゴいうんか
頬骨みたいな感じ。全体が牛に似たような動物のような。(ガイコツとは?) 目がくぼんでい
るし目にみえない。そのガイコツ。両側の黒が強調されているし、目のとこがそんな感じしま
すね。

5. W FM, FC A 1.5

6. W Fc AA_t 1.5

V 10'' これもトリという感じですね。立って両側にハネが出てるという状態ですね。ちょっ
と、ま、それ以外あまり感じませんけど。50''

(inq.) 頭 (d₃) をつき出してる感じ。足 (d₁)。両側に広がっている (D₁) のがハネ。

7. W FM A P 1.0

VI 5'' これも動物の敷物の皮みたいな感じです。剝製にして敷物にしたような感じです。そう
思いますけど。——以上です。はい。20''

(inq.) 頭の部分 (D₅)。胴体 (D₁ から上下の突起を除く)。足 (d₂ と D₁ 上部の外側への突
起)。(敷物には?) 洋画なんかで、テレビみてんで、ちょうど動物の敷皮こんな感じして
ますんでね。頭がやや不自然。ここいらの感じ。

8. W Fc Aobj P 1.5

VII 10'' これあの小さい子どもですか。漫画的にこうなんか向いあってる感じですけど。なんか人形いうか、小さい子どもの感じもしますけど。漫画的に。ここ (D₁) にこう台あって人形が向いあっている。飾り物のような感じしますね。——ちょっとこの頭の毛 (d₂) が上にとっても上ってて、右と左に出ているのが耳のようで、置物のような感じですけども。それ、そう感じます。55''

(inq.) 頭の毛はね上げててちょっとおどけた感じ。へこんでいる所 (D₃ 内側上部の輪かく) が目の感じ。手をこういうふうな形で広げてる。なんか下に石の台かなんかあって、その上にちょうど乗ってる。置物の人形さんみたいな感じですけども。

9. W M (H) 4.0

VIII 7'' まん中のはわかりませんが、なんか両側 (D₁) にケモノがおるという感じですけども。ちょっと上の (D₃D₄) は判りません。下の (D₂) はなんか花みたいな感じですね。これだけとったらハナビラのような感じですけど。——ちょっと思い当たりませんけれども、この、ま、両側にケモノがおるという感じしますけれども。まん中のはちょっと、あまり気持のよい色じゃないけれども、まん中のこの上の色は＝。そんな感じです。5''

(inq.) これがなんかケモノいう感じ。これだけ (D₂) ハナビラのよう。ちょうど色もピンク色ですし。まん中僕の好かん色。

10. D F A →P 1.0

11. D CF Pl 0.5

IX これなんかきれいなどっかの南洋の花ですか。こみいった花ですけど。花にみえますけど。なんかこう、これだけ、上のこれだけだったら怪獣が火を吹き出してる感じもするが。なんか火をたいてまん中に水があって、上に怪獣が火を吐いてる感じもします。——そんな感じですけども。45''

(inq.) 全体の感じが。こんな花ないでしょうけど。パッとみた感じ。火 (D₆) があって水 (D₁) があって、怪獣いうんか人間が怪獣的に描いてありますね。火を吹いている。口から。そんな感じです。これ目があってここに角があってという。角のような感じもするし、手広げてる感じもする。(なんで水?) 火をたいて、人間がたかれてて火を吹いてて、水の中につけられてるという感じがした。(なんで水にみえた?) 色がそういうふうな感じですけども。(釜は? ない?) そうですね。

12. W CF Pl 0.5

13. D→W FM→M, CF (H) Fire Water -1.0

X 20'' なんか虫が。ここにこうまん中に二つあるの虫みたいで、両側の空色のも虫みたいな感じで。まあ、あと上からたれ下っているのは花のような感じですけどね。全体としては——よく意味が判りませんが。クモのようなものが両側におるという感じで、まん中のはなんか

漫画的な虫がおって、あとはまん中に花があるような感じですけども、全体として何かに見えるという感じはありません。＝それだけですか。40''

(inq.) これ (D₄) 漫画的、水虫出たか、という宣伝なんかで出てくるような。クモ (D₁)。花がこうあって、シン (D₄) になって、空色とこの二つ (D₄) 除いて花。(なぜ?) 色ですけど。下に花が開いているという感じ。

14. D F (A) 1.0

15. D F A P 1.0

16. W CF Pl 0.5

(好きなカード) VII。他のはあまり。やさしい感じがしますね。人形ではほえましい感じがする。その次はこれ (V)。トリがハネ広げてるというので。これ (VII) はほんとに柔い感じ。色も濃くないし。

(嫌いなカード) II。これ顔なんか嫌い。色が赤色、顔の表情とか。(どんな感じ?) 人間なら人間らしく描けばよいのに怪獣的に描いてあるしね。(IIの黒いとこだけでは?) あまり。黒の中にあるのだけ見たら、電気の照明具みたい。こうしてみたら、闇の中で電気がぶら下って灯がついてる感じ。

量的整理

R:16 T:18'10'' T/R:68'' T/R_{in}:10'' T/R_{ic}:13'' (VIII, IX, X)%:44 W:11+1
D:5 M:3+₁ FM:3 F:5 Fc:2+₁ CF:3+₂ H:4 A:6 AAt:1 Aobj:1 Pl:4
Fire:+₂ Water:+₁ F%:31 W%:69 D%:31 W:M=11:3 M:SumC=3+₁:3
FM+m:Fc+c+C'=3:2+₁ F:FK+Fc=5:2 Fc+c+C':FC+CF+C=2+₁:3+₂ FC:
CF+C=0:3+₂ A%:44 P:6 FL:1.84 Succession:orderly

解釈

A 量的分析

1. まず R が16しかないこと、T/R が68'' もあることは、この人の精神機能がかなり低下していることを示している。しかし、A%の高いことやRに比べてPの多いこと、継起が規則的であり形体水準の高いことを思いあわせると、それが抑鬱的な人にしばしばみられる特長であるにはしても、同時に、できるだけ精神活動を抑えることによって、全体的な破綻を避けようとする、自我防衛的な印象がある。
2. ところがFが5しかなくF%:31というのは、かなり低い値である。元来F反応は、周りの世界をありのままにうけ入れようとする受け身の構えを反映している。できるだけ自分を現わすまいとするけれども、周囲に対する関心のまったくは失われていない時、この反応が多くなる。だから、被験者が防衛的な場合はF%がもっと高いのが普通である。この被験者の場合、F%は

日本人としては低い方であり、それだけ一方で豊かな感受性とそれに応じた多様な柔軟性の持主と考えられるが、他方、世界を即物的に把握しかねて、たえず刺激にふり回される不安定な性格なのかもしれない。しかし、 $(FK+F+Fc)\%$ は44であるから、むしろ柔軟性のある豊かなパースナリティとみなすべきなのであろう。

3. M は主反応が3、副反応が1であり、FM は主反応のみ3である。運動反応は、F 反応が自分を世界に合わせる傾向を示すのに対して、世界を自分に合わせる傾向を反映している。刺激をうけとめるのに、まず自分なりの内的な感じが基盤になるのである。その意味でF 反応が人格の客観的側面、運動反応が主観的側面を表わしている、ということができる。もちろん、運動反応にも形体は含まれているから、それが単に主観性だけを示すわけではない。また、運動を人間の形で見るか動物の形で見るかは、上にのべた内的な感じがどれだけ意識に近いか、によって決まる。意識に近ければ、それだけ人格にくみこまれやすいわけである。

この人の運動反応は、数からいっても少なくないし、とくに M の形体水準が高い。世界を自分独自の観点から捉えることが可能であり、しかもその際、必ずしも客観性を失うことがない。知的水準も高く内的世界は豊かである。FM 反応とのバランスから考えて、相当な活力もある。ただ FM→M のマイナス反応が一つあることを見逃すわけにはゆかない。IXカードのWであり、副反応に CF を伴っている。内容的および継列分析による一そうつつこんだ考察が必要であるにしても、少なくともある種の条件のもとでは、この人なりの認知の仕方が現実性を失うことを考えておかねばならない。豊かな資質に恵まれているはずのこの人が、1.でみたように、十分その力を発揮できていないのは、そのためかもしれない。

4. 陰影反応としては、Fc が主反応で2、副反応で1である。陰影反応を私は、いわゆる大洋感情したがって基本的安定感の指標としてみうるのではないかと考えている。もしそうならば、F 反応との比率を考えても、この人のムードが基本的には健常な範囲内に入ることになる。ただし陰影反応がすべて形体優位の反応であることは、F 反応が比較的少ないにもかかわらず、運動反応をも含めて、この人の形体に対する並々ならぬ関心を示すものである。それは、この人の豊かな感受性や多様な可能性が、積極的に生かされることなく、社会性ないし公共性の枠組にむりにはめこまれているからかもしれない。この人にとって、自由かつ自発的であることは、その意味で危険なことであり、かえって不安定の原因になることさえある。

5. すると、この人の $W\%:69$ や強迫的な W 傾向や $W:M$ の比率などは、単にこの人の野心を反映するだけでなく、たえず全体の意味を明確に把握しようとする防衛的な試み、ということができる。それは、すでに1.でみたこの人の防衛的態度に通ずるものである。ただし形体水準の最高は4.0であり、ウェイトをつけた平均1.84とともに、この人の知的能力がきわめて秀れたレベルにあることを思わせる。

6. 色彩反応は、形体反応と運動反応が、その方向は異なるにせよ、刺激に対する知覚の主体としての、いわば自我の働きの二つの面を表しているのに対して、主体のかかわる前にとびこんでく

る刺激、たとえば感情、に対するわれわれの態度を反映している、と考えられる。いわば、形体反応なり運動反応が、主体の刺激を捉える働きを表わすのに対して、色彩反応は主体が刺激に捉えられる受け身の経験を示している。それだけに、それらの刺激は外からのものとして感じられ、時に無力感の伴うことがある (Schapiro, 1965; Schachtel, 1967)。

ところでこの人の色彩反応は、今までの形体優位が完全に崩れている所に特色がある。すなわち、CF のみで主反応が3、副反応が2である。また、D 反応がはじめてⅧカードに現れている。さらに、唯一のマイナス反応がⅨカードに出ている、(Ⅷ, Ⅸ, X) %は44で高いが、反応の形体水準は他のカードに比べて低下している。そこから、この人が非常に感じやすい人であることが判る。いわば、事態の意味を明確にする前にまず感じてしまう。そして、わけも判らぬうちに感情に流されてしまいそうになる。しかも、それを十分コントロールするだけの力には欠けている。だから感情に捉えられると、場面の意味を漠然と把握するにとどまるか、現実的具体的なものに視野を狭めて対応することしかできない。知的効率は低下するし、この人のもつ内的な豊かさも姿を消してしまう。その限り未熟な反応には違いないが、大きく崩れることはない。しかし、感情に捉えられながらむりに分別を働かそうとすると、かえって非現実的な世界におちこむ可能性がある。この人の内的な豊かさと鋭い感受性がうまく統合されず、逆にバラバラに作用するからであろう。

(まとめ) この人がきわめて秀れた知的能力の持主であり、実生活でもかなりの能力を発揮していること、かつ、それにふさわしい豊かな空想力や繊細な感受性に恵まれているのは明らかである。基本的安定感も損なわれておらず、やや公共性に対する配慮のすぎることを除けば、むしろ秀れたパースナリティの持主とみるべきであろう。それに対して情緒的な未熟性がきわ立った対照を示しているのが、この人の特長である。この人の感ずる能力は、おそらく人一倍のものである。しかし、何を感じたのかその意味を明確にすることができていない。だから、感情に捉えられ動かされていながら、なぜそうなるのかにこの人は気づくことができないのである。一方で、人並み以上に成熟した分別やそれに伴う自信をもちながら、他方、そのような分別の及ばぬ側面がある。それが何らかの落ちこみとして経験され、さらに無力感ないし抑鬱感につながる可能性は十分にある。

現代は感情抑圧の時代であるといわれている (Ginott, 1969)。だから多かれ少なかれわれわれは、自らの感情の意味について十分には知っていない。しかしこの人の場合は、あえて確かめようとせぬ程に抑圧が強いものと思われる。それはこの人にとって、感情が、自らの生活を豊かにするよりも、つねに悪しき衝動としてマイナスの方向で感じられているからであろう。この人の主訴は、かなり強い抑鬱感である。それがしばしば自責の念、したがって罪悪感に由来することとは、よく知られたことである。するとこの人の抑圧している感情は、そのような罪悪感と結びついているもの、と考えられよう。この人は、「母と同居したかったのに、結婚のため別居しなければならなかった」とのべている。しかしこの人の抑鬱感が、このような意識された罪悪感か

ら来ているとは考えにくい。むしろそのことがきっかけとなって、より深い罪悪感が触発されている、と考えるべきである。それが何であるかは今のところ判らないし、より明確なことは内容分析にまたねばならない。しかし、母親に対する隠された敵意のごときもの、を予想することはできるかもしれない。

いずれにせよ、おとなの分別と子どもの情緒をもったこの人が、一種の欠落感ないし無力感をもつのは当然である。それを補う意味で、つねに場面全体の意味を明確にしようとする試みが、野心的な傾向として現れている可能性がある。また、できるだけ公共性のある態度をとり続けることによって、緊張を和らげようとするために、この人の潜在能力が十分に発揮されていない。そのために、全般的にやや固苦しい印象を与えるようになっている。かつ、余りにも強い情緒が触発されると、非現実的な経験におちこむ可能性がある。しかし、基本的パースナリティが損なわれているとは思えず、問題は精神病的というよりも神経症レベルのものと考えられる。それだけ予後は明るい。治療の方針としては、何よりも罪悪感を和らげることである。つまり、自らの隠された感情を受容しようよう励ますことになる。しかしそれは、この人の人格の統合のために今まで抑圧してきた感情に直面することであるから、治療の経過は複雑であり、かなり長期の接触が必要である。

B 継続的および内容分析

I カード このカードでまず二つの W と F を出したのは、新しい場面に対するこの人の基本的態度の反映かもしれない。つまり、若干の緊張とよい仕事をしたいという野心と、できるだけ客観的にうけ入れられる無難さを望む気持とである。しかし、第 1 反応の形体水準が 0.5 であるのは、やはり初頭不安の存在を認めねばならない。出だしに、十分な能力を発揮しにくいのである。かつ、ハナビラという内容には女性的な感じがあるが、「外に開いている」というのは外拓的なニュアンスをもち、自己主張的な意味があって、軽い葛藤が含まれているかもしれない。シンメトリーの指摘は、そうした不安なり緊張を機械的合理的に処理しようとする表れとみることができる。しかし第 2 反応では P を出し、はじめの不安は解消している。ところが「頭がない」というコメントがあり 一種の無力感が現れている。同時に「飾ってある」という外側への顕示的な志向がみられ、ここにも一つの葛藤が認められる。その緊張を、過度の正確さ、というより誤りのなさによって処理しようとするのは、第 1 反応でのシンメトリーの指摘に通ずるものである。また、自分の方からなかなか終りといえないのは、一方で、決意しにくい受け身の構えと、他方、まだまだやれるという自己主張的態度の結果かもしれない。

一見何気ない反応の背後に、かなり根強い葛藤の隠されている可能性がある。とくに崩れた印象はないけれども、正確さの強調にややニューロティックなニュアンスがみられる。

II カード ここでかなり質の高い M が出ている。方向は内側を向いているが、「向いあって」というのは直面している意味があり、対立する二つのものを反映しているのかもしれない。ま

た、顔の部分がだんだんトリに見えてきて、「部分についていってもよいのか」と訊ねながら、結局反応を二つに分けることができていない。これは一つには、この人の W 傾向を示しているけれども、同時に、Rapaport (1970) のいう意味での知覚と連想の結びつきがスムーズでないため、と考えられる。つまり、知覚に縛られて連想の統合的な過程の進まないところがある。そのために、見えてきたものを明確に位置づけるのが難しいのである。そしてそれらを並列的に並べることによって、全体の意味を損ってしまう。I カードでみたように、この人の能力からみて、これは一種のおちこみである。それだけ主体性を欠いているのだが、「人間を茶化している」というのは、そのことに本人がある程度気づいていることを示している。これは、A でのべた、感じ動かされていながら、そのことの意味を明確にしない、という態度に通じている。ということは、何らかの抑圧があることである。つまりこの人は、ここで人間の姿とトリのクチバシを見た。そこには本人も気づいていない何らかの関係があり、これを切り離して別々のものにすることができないのである。しばしばこのカードの人間像が女性像として見られることを思えば、そこに母親についての何らかのイメージがあったのかもしれない。しかしこのカードでの障害の程度が、それ程大きいわけではない。

このカードでも積極性一消極性の葛藤の存在と、秀れた能力にもかかわらず、本人も気づかないコンプレックスに捉われて、それが損われやすいことが示されている。

III カード ここでも質のよい W の M であり、P でもある。しかし運動の方向は、Piotrowski (1957) に従えば阻害型であり、今までにみてきた葛藤状態がより明確に現れてきた、とみることができる。D₁、D₂ を火とみて、それと M とを結びつけて作業場という構成員は見事である。みずからの内面と外界とのバランスがとれている限り、未分化な情動刺激でもその儘とり入れて、かえって全体に活気を与えることができるのである。ただし、質疑段階での質問に答えてのことではあるが、この人間像を、胸の突起からは女だが仕事の性質から考えて男、ととべているのは、II カードの、ニワトリの顔をした人間、ということと同じ傾向を示しており、一つには、実感としては女性であるものを、理論的に男性にしているということと、もう一つには、せっかく男性と見ながら、細部に女性的特長を認めるとそれを無視できていない。ここからこの人の積極性一消極性の葛藤を、男性性一女性性の葛藤とみることができるかもしれない。

IV カード 第 1 反応は外拡的姿勢の FM である。それが Fc と共に出ているのは、自己主張と依存性が混在しており、好き勝手なことをしても許されるという期待、つまり甘えの態度を示している。このカードが父親カードであるとする仮設をうけ入れるならば、FM 反応での姿勢は子ども時代の態度を示している、という Piotrowski の主張が裏づけられるのかもしれない。しかし、夜とか暗い所というのは、こうした態度が明るみに出てはならないことを意味している可能性がある。アフリカの映画うんぬんも、それらのことがこの人の意識からかなり遠いことを示しているのであろう。ふたたびこのカードが父親カードであることを思えば、それらが、おとなの男性としてうけ入れ難い衝動であるのかもしれない。また、少し気味悪い感じのある

のは、何らかの不安の反映と思われる。第2反応は、Beck流に言えばY系統の反応であり、FC'のニュアンスもあって、不安のサインである。ウシの顔なのであるがガイコツであり、その感じはとくにへこんだ眼からきている。パラノイドな感じがあり、全体に無気味な印象を与える。人に見せるべからざる無意識が、意識に近づくことでこの結果を招いたとすれば、この人の内面を掘り下げることには、相当の危険性を考えねばならない。二つの反応を通して、甘えと暖かさ、ツノのあるケモノの逞しさと、ガイコツとしての生命感の喪失といった対照があり、それらが全体としての無気味さに彩られている。男性としての同一化に問題があるのかもしれない。

Vカード 弱いFMであるが、運動方向は外拡的である。頭をつき出してもいる。基本的には、かなり積極的な活気の持主なのかもしれない。それが公共性を配慮しすぎると、Iカードの第2反応のように、同じようなPでありながら、頭がなくなったりするのであろう。

VIカード 動物の頭、胴体、手足を見て、十分Fとしての把握のなりな上で毛皮ということであり、この人なりの依存欲求が、十分な公共性をもってうけとめられていることを示している。ただ、剥製にして敷物にというところに、一抹の生気のなさ、軽い被害感的なニュアンスがある。また、外国映画のテレビでというのは、IVカードの第1反応のアフリカの映画と軌を一にしている。少し意識から距離があるのであろう。もう一つ自由に依存欲求を表現できず、対人関係に若干のよそよそしさがあるかもしれない。むりをすると、やや被虐的な感じの伴う可能性がある。頭がやや不自然というのは、しいていえば、フェリックスなイメージと依存欲求のアンバランスの表れである。この人にとって、男性・大人になるためには、多少の自発性を犠牲にするのはやむをえないのであろう。

VIIカード 秀れた反応である。表情も豊かで運動方向はMとしてはじめて外拡的である。しかし子ども（性別には言及していない）であり、石の台に乗った人形でかつ漫画的という。活気のある自己主張的なあり方が、幼児的幻想的傾向から漫画という非現実かつ自嘲的連想につながり、さらに置物としてまったく生彩を失うに至っている。飾り物ということでは、Iカードの第2反応と同じく、外界への多少の積極性はとどめているにしろ、である。思弁的になるのを恐れなければ、このカードを母親カードとして、D_Iが子どもを支えてはくれても、実は石のように冷くて、本来の生き生きとした感じを凍らせてしまったともいえるし、それがIVカードVIカードのFcにみられるように、愛情欲求の自由な表現を妨げ、その客体化およびそれに伴う不安をひき起すのかもしれない。また、運動感覚を次第に静的な知覚に変えてゆくこうしたパターンは、たとえばVカードの、ハネを広げるのではなく広がるというFM→F的な傾向や、IIカードのトリの顔をした人間のように、H→(H)、IIIカードの、場面からみて男という考え方、すなわちM→F的方向を反映している。幼児的なものに結びついてはいるものの、豊かな幻想と楽しい気分を否定できないにもかかわらず、明るく積極的な経験の背後に、隠されたもう一面を考えざるをえない。

Ⅷカード 「まん中は判らん。気持のよい色じゃない」といい、二つの D しか出してない。

しかし、一応全領域に言及して、この人の W 傾向は崩れていない。それにもかかわらず W を出せなかったのは、気持の悪い色、すなわち冷色に捉えられたためであろう。ということは、この人が苦痛の多い否定的感情に敏感でありながら、それをうまく統合できないために、精神機能がかなり低下することを意味している。それが現在の出勤不能状態とつながっているのかもしれない。しかし、D₁に P の動物を見ることができ（何であるかはいえないけれども）し、暖色部分については、あいまいな形体ながらも反応することができている。だから、情動場面にさらされてかなり動揺しても、ある程度視野を狭めることによって、何とか場面对処することはできそうである。そして次のカードやⅡカードのトリの顔をした人間のように、知覚のレベルでは当然分けるべきものを、連想のレベルでは分けることのできない場合に比べると、自我のコントロール機能は、このカードではより統合的、ということができる。

Ⅸカード 第 1 反応は、Ⅷカードの第 2 反応と同じように、CF で花である。しかし、「こみ入った」というのは、この人なりにどう纏めてよいか判らない不安があるものと思われるし、「南洋の」というのも、それだけ自分から遠いことであり、一種の違和感の表れということができる。かつ、熱帯の花の爆発的なエネルギーの感じられている可能性もある。W は、その不安を整理しようとする試みとも考えられるが、むしろこの図版全体の印象に捉えられて、Ⅷカードのように部分に分けることができなかった、と考えた方がよさそうである。そして、もはや花の、したがって女性的なイメージではうけとめえなくなったのが、第 2 反応なのであろう。ここでは、まず怪獣が口から火を吹き出しているのだが、質疑段階ではそれが人間に変わり、逆に火にたかれ水につけられている、と見られている。おそらく、今まで積極性—消極性ということでバランスのとれていたこの人の攻撃的衝動が、ここで爆発したものと思われる。しかもそれらは、加虐的被害的な色彩をおびており、また、3 回目の目の指摘から、ややパラノイドな気分もうかがえる。「まん中に水がある」というのも唐突で、「色からみて水」といいながら、「釜はないのか」というやや強引な質問に、「ない」と答えている。この反応だけをとれば、純粹色彩反応ということになる。全体として、明らかに連想内容が知覚の枠組を超えており、内的な衝動が、ほとんどコントロールされることなく表出されている。この人が、消極性ないし女性性の背後に隠しているものは、おそらくこの攻撃性である。それが何に由来するものかは明らかではない。おそらくこのカードの、怪獣のように描かれた人間、または火責め水責めにあっている人間が誰であるのか、と関係がある。いずれにしろ、時にこの人の防衛の崩れることは考えておかねばならない。その場合、この人の W 傾向と良質の M を産しうる能力が、被害妄想的世界を形成する可能性がある。ただしこの反応をマイナスに評定したのは、M—とか FM—という意味ではなく、水という反応の全体への組みこみ方の異常さのためである。したがって障害の程度はそれ程重篤なものとは思えない。（なお、このカードについては、質疑が不十分なため領域を十分明確にしえなかった。とくに、火を吐く怪獣が、

D₁なのかD₂なのかあいまいなのである。もしD₁だとすれば、混淆反応の可能性はある。少なくともテスト段階ではD₂であったと思うが、質疑段階ではD₁に移動していたかもしれない。もしそうだとすれば、この人の問題はより深刻な意味をもつことになる。）

Xカード このカードでは、IXカードの動揺からどうやらたち直っており、この人の回復力の強さを示している。とくに第1反応は、やや恐怖反応的な意味があるのを、漫画的ということで巧みに処理している。第2反応のクモも感じのよい反応ではないが、Pのことであり、それ程問題にする必要はない。ⅧカードのPと同じ意味をもっているのかもしれない。第3反応では、IカードⅧカードなどにみられる、不安に対するこの人の常用のパターンが甦っている。「全体としての意味は判らない」とのべて、W傾向のあるこの人としては若干の不安が示されているけれども、図版のすべての部分に反応しており、少なくとも、IXカードのように図版に捉えられてはいない。

限界検査

もっとも好ましいカードはⅦカードで、「やさしい、人形でほほえましい」という。この人の本来の自己主張的態度—攻撃性が、幼児的であること、人形であることから、この人に安心感を与えているのかもしれない。母親カードであることを思うと、この人は子どもである限り、かなり自由にかつ自発的にふるまえるのであろうか。ついでVカードを「トリが羽を広げているので」という理由で選んでいるのも、幼児的な自己主張的傾向が、この人の基本的態度だからかもしれない。

もっとも嫌いなカードはⅡカードである。赤い顔の怪獣的表情が嫌だという。このカードで、IXカードの場合に似た経験の生じたこと（怪獣ということと、Wで反応せざるをえない）が判る。ここでSに言及しているのは、この人の自己主張的な態度が、めつたなことで顕在化しないことを示しているのであろう。電気というのは、しいていえば、このような非同調的態度の中に、この人の前途を照らす鍵がひそんでいるのかもしれない。

所見

この人の基本的な問題は、消極性—積極性、女性性—男性性の葛藤である。時にそれは、おとな性と子ども性の対立としても経験される。ただしその場合は、子どもであるということから、積極的ないし自己主張的態度に若干の許容度がある。これらのことは、現実場面でのあり方としては、自発性を犠牲にすることによって常識性ないし公共性を維持する、という方向をとる。これはおそらく、隠された烈しい攻撃性に対する防衛としての意味をもっている。自発的であることは、単に子どもっぽいというだけでなく、この人にとっては、男性的ないし自己主張的であることを意味しており、それが背後にある攻撃的衝動とつながるからである。だから、感情はその意味を明確にされることがなく、十分人格のかかわったレベルでは受けとめられていない。

この人の攻撃性がどうして形成されてきたかについては、ロールシャッハテストの結果から何

ともいえない。しかしあえていうならば、おそらく両親、とくに母親との錯綜した人間関係の結果である。この人の女性性なり消極性は、多分母親の期待を反映している。この人にとっては、そのような母親との結びつきが非常に大きい支えであった、と思われる。しかしそのことが、同時にこの人の十全の成長を妨げていたことも否めない。それがこの人の、加虐的被害的傾向を養ったのはありうることである。しかし、そのことに十分気づいていないために、この人は自分でも判らない感情に捉えられることがあり、そういう場合、判断に合理性を欠くうらみがある。

現在の症状は、この人の会社での立場、結婚、母親との分離といった状況の変化が、こうした潜在感情をいやおうなしに顕在化したためと思われる。実はこのような状況の変化は、自立を願うこの人の必然的な動きであり、意識されないにしても、みずから望んで作りだした意味もある。しかし、潜在感情が余りにも気づかれなさすぎる時、それは表面的な自責の念から、より深刻な罪悪感に発展する。それが抑鬱感として現れることは、十分理解できることである。またかすかに感じられている以上、他人に見すかされまいかという危惧につながって、被害感情的なものに発展する可能性も否定できない。

一方、この人はきわめて秀れた知能の持主であり、かつ内的な資質も豊かである。基本的安定感にも欠けていない。だから重篤な障害を考えるのは困難である。従って心理治療には十分適応し、途中かなり深刻な動揺を経験するかもしれないが、予後は良好と思われる。さし当っては、表面的な罪悪感をとる意味で、かなり支持的な方法が有効かもしれない。しかしこの罪悪感は、すでにのべた攻撃衝動とつながっており、この衝動をうけとめぬ限り解消するものではない。そのためには、おそらく母親との人間関係の吟味が必要で、それはこの人にとってきわめて苦痛の多い経験を意味している。従ってかなり長期の治療を予想すべきであり、急速な治療の展開を望むのはかえって危険な感じである。

おわりに

ロールシャッハテストの解釈例を、ある抑鬱症患者について、プロトコルから解釈の各段階、最終の所見にいたるまで記述した。このテストの実践家は、みずからの解釈例をたえず世に問わなければ、独りよがりのそしりを免れがたい、と思うからである。しかしはじめにのべたように、そうした試みはわが国ではとくに少ないようである。前回の報告（氏原，1970）に続いて、あえてこのレポートを提出する所以である。

参考文献

- Ainsworth, M. D. 1954 Illustrative case study In B. Klopfer et al Developments in the Rorschach technique vol. I 611-687 New York Harcourt Brace & World.
- Ainsworth, M. D. 1954 Problem of validation In B. Klopfer ibid. 405-500.
- Beck, S. J. et al 1961 Rorschach's test I New York Grune & Stratton.
- Beck, S. J. & Molish, H. B. 1967 Rorschach's test II Grune & Stratton.
- Beck, S. J. 1969 Rorschach's test III New York Grune & Stratton.

- Ginott, H. G. 1969 Between parent and child New York Avon Book.
- Harris, Jr. J. G. 1965 Validity: The research for a constant in a universe of variables In M. A. Rickers-Ovsiankina (ed.) Rorschach psychology 380-439 New York John Wiley & Sons.
- ヘルツ, M. R. (小池澄子訳) 投影法の危機 ロールシャッハ研究Ⅷ 159~165 東京 牧書店
- Holt, P. R. 1972 Editor's foreword in Rapaport et al Diagnostic psychological testing 1-44 New York International Univ. Press.
- Holzberg, J. D. 1965 Reliability re-examined In M. A. Rickers-Ovsiankina (ed.) ibid. 361-379
- 片口安史 1971 作家の診断 東京 至文堂
- 河合隼雄 1969 臨床場面におけるロールシャッハ法 東京 岩崎学術出版社
- Klopfcr, B. et al 1954 Developments in the Rorschach technique vol. I New York Harcourt Brace & World.
- Klopfcr, B. & Davidson, H. H. 1962 The Rorschach technique New York Harcourt Brace & World.
- Klopfcr, B. & Klopfcr, W. G. 1968 Message at the 10th anniversary of Rorschachiana in Japonica 東京 ロールシャッハ研究会編 ロールシャッハ研究 IX, X 合併号 東京 牧書店
- 小保内虎夫 1958 ロールシャッハ法の批判と展望 ロールシャッハテスト 2 291~301 東京 中山書店
- 児玉省(監修) 1960 ロールシャッハテストの実際適用例 ロールシャッハ研究臨時増刊号 東京 誠信書房
- 村瀬孝雄 1970 被験者が自己解釈を行った一症例 片口安史他(編) ロールシャッハ法による事例研究 101~119 東京 誠信書房
- 村瀬孝雄 1973 投影法, とくにロールシャッハ検査の社会的意味 臨床心理学研究 vol. 10 No. 3 87~92
- Phillips, L. & Smith, J. G. 1967 Rorschach interpretation New York Grune & Stratton.
- Piotrowski, Z. A. 1957 Perceptanalysis New York The MacMillan.
- Rapaport, D. et al 1970 Diagnostic psychological testing London University of London Press.
- Schachtel, E. 1967 Experiential foundations of Rorschach's test London Tavistock.
- Schafer, R. 1970 Psychoanalytic interpretation of Rorschach testing New York Grune & Stratton.
- Schapiro, D. 1965 A perceptual understanding of color response In Rickers-Ovsiankina (ed.) ibid. 154~201
- 鈴木伸治 1972 病院における心理臨床の問題点 臨床心理学研究 vol. 10 No. 1. 83-91
- 氏原寛 1970 ロールシャッハテスト解釈例(その1) 臨床心理学研究 vol. 9 No. 3. 52-59